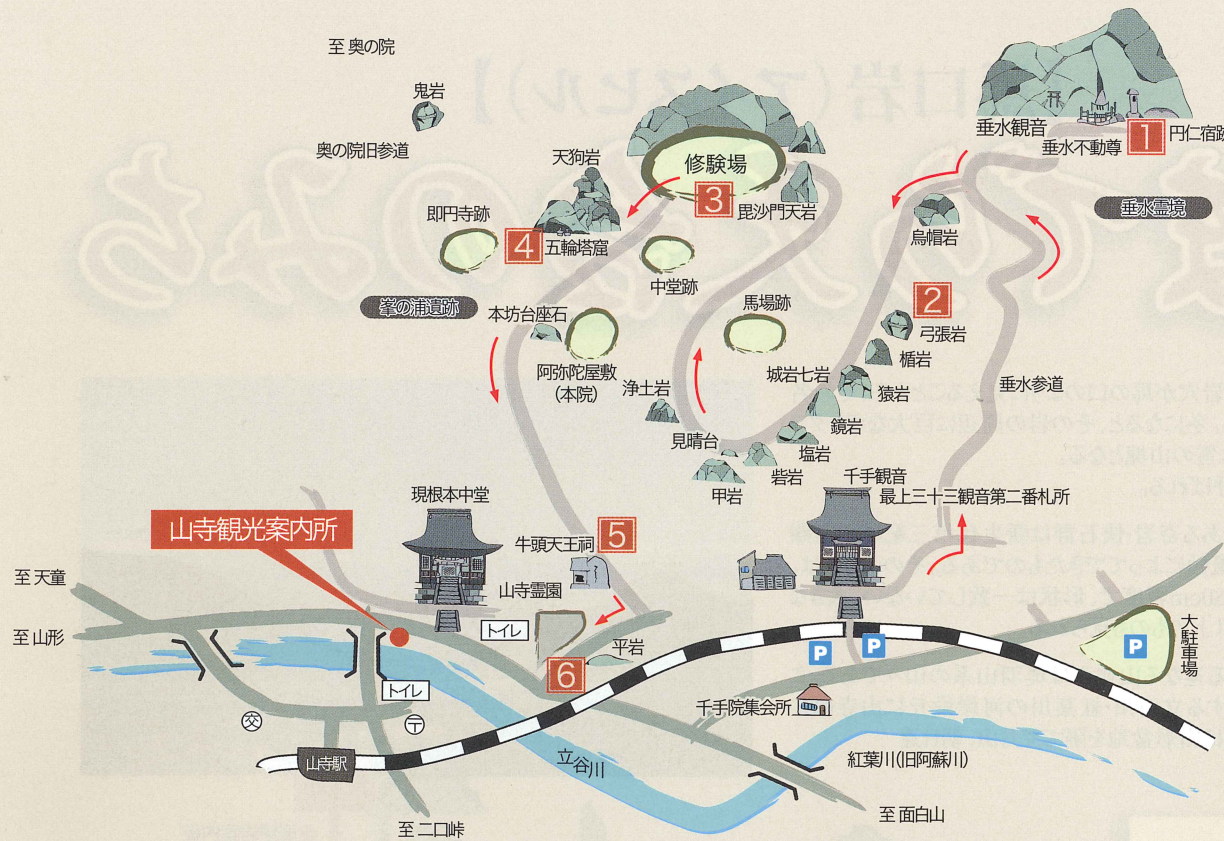
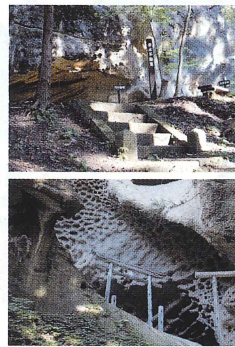


やまでら 天台のみち



1 垂水遺跡

ほの暗いここ垂水遺域には、大正時代頃まで山伏の居住修行の姿があった。説によると、目の前の窟は山寺を開山(860年)した慈覚大師円仁の修行宿跡とされる。巨大な岸壁一面の蜂の巣状の穴、洞には古峯神社、稲荷神社が祀られている。また、巨大な岩の割れ目から水が滴り、中ほどの暗がりには不動明王が拝される。左手の岩肌には、千手観音が線刻されていたと伝えられる。自然の妙と尊崇する神仏を拝した先祖の心が伝わってくる。



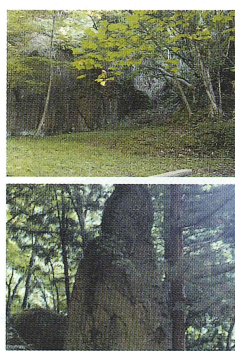
2 城岩七岩

七岩が並ぶ山の頂である。対岸に見える所部集落から眺めると、七つの岩。弓張り岩、盾岩、猿岩、鏡岩、塩岩、砦岩、曹岩が城壁のように並んで見える。山の頂は平で、山肌が数段の階段状になっている。まさに中世の山城の様相をなし、隠し砦を想起させる。(是非、対岸の所部集落からの眺めをお勧めする)



3 修験場跡・毘沙門天岩

この広場が修験場跡と伝えられている。正面の屏風のような岩、背後に立つ毘沙門天岩、その左に男岩(男根)、奥に女岩(女陰)、そして広場を下がつたところに胎内くぐり(産道)がある。これらを総じて考えると、この広場は神秘的な、厚い庶民信仰のお祭りの広場のよう思われる。慈覚大師円仁が山寺を東北布教の中心においたのはこのような宗教的祭事があつたからではないのかと想像をかき立てられる。



4 五輪塔窟・本院跡

目の前の窟には、崩れた多くの五輪塔の姿が見られる。以前には、完全な姿の五輪塔が並んで、供養が怠げられた。しかし、持ち去られたり、崩れたりし、見る影もない姿になってしまった。五輪塔も刻まれた年号の中に鎌倉時代の年号が見られる。

この先杉の林を過ぎると、一面萱野の広場。阿彌陀屋敷とも呼ばれ、本院跡である。萱野から見つかった多くの礎石の一つを参道の傍らに移してある。跡地の隅に阿彌陀如来を祀る石祠、近くに即円寺跡がある。



5 牛頭天王・神母女天

ここ(千手院集落への旧街道)が峯の浦霊域・本院跡への入り口である。山肌に二基の石碑が立っている。一つに牛頭天王、もう一つは神母女天と刻まれている。牛頭天王は地獄の鬼で頭は牛の姿をしている。祇園精舎の守り神で仏と村落を護ることから、集落の入口に祀られている。神母女天は、千手観音に眷属する二十八部衆の仏である。

山寺には、牛頭天王に初なるのキユウリを供え、豊作を祈願する風習があった。



6 平岩

ここに、平らな岩盤が露出しておつたのでこの地名となった。付近には、霊域の入口を示す各種の石碑が立っている。

この道が、現在の所部集落、千手院集落への本道で、明治時代には千手院集落の大事な生活道であった。

道の傍らに岩がある。この岩を「つむぎ岩」と言い、夜更けにギーギー音を立てて糸をつむぎ、ここを通る村人を恐ろしがらせた「つむぎばばあ」という昔噺が伝わっている。

